

大会初日がやって来た。

リラックスし、この日を迎えるアリーナ。対照的にプレッシャーでガチガチのクリフトをからかう余裕すら見せるのであった。

モニカが前夜アリーナに渡した宝石<大いなる蒼の^{エンドール・グラン・ブルー}エンドール>を見とがめるプライ。これはエンドール王家の女性のみが身につける事を許される国宝。それをアリーナがつけでは大変な問題となる、と危惧するプライであったが、直後、エンドール王に謁見した際、アリーナへの宝石の貸与が許可され、安堵するのであった。

だがその後、アリーナが王に真っ正面から問うた。

「昨日、選手名簿を見せていただきました。私の名前が伏せられていたのは、何故ですか？」

もし、己の名が客寄せに使われていたとなれば、アリーナの怒りは爆発するであろう。まさに危機！

しかし、エンドール王は、表情にその真意を見せず、平然と答えるのであった。

「他国の王女様を、その身を危険にさらしてまで広告塔に仕立て上げる事など、余には出来ぬよ。そんなリスクを冒す気には、とてもなれぬ」

やがて、組み合わせ抽選会の会場・^{グランドホール}大広間の準備が整った。

＊

この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ4二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第2章より～

第4話 「組み合わせ抽選会（前編）」

あさづけ兄貴

エンドール城、王の間より続く廊下。

ほぼ王族専用と言っていい、闘技場^{コロシアム}地下への直通の廊下である。

エンドール王、モニカ、そしてアリーナ、クリフト、ブライの五人が、王の間から闘技場の方向へ向けて、歩いてゆく。

採光窓から差し込む朝日が、思いのほか強い。

「もうすぐ、控え室への別れ道があるのだが　　おお、見えた」

先頭を歩くエンドール王が言った。

彼の視線の遙か前方に、兵士がひとり立っている。その姿を見て取ったのだ。

兵士は、こちらの姿を認めると、背筋を伸ばし、直立不動で敬礼の姿勢を取った。

王も、それに対し、右手を上げて応える。

「控え室、異常ありません！」

一行が近づくのを待ち、兵士が敬礼のまま、報告する。

ちょうど兵士の立っているところから、別れ道が左側に延びていた。

「うむ。ご苦労」

王が答えた。

「お方々を控え室へ」

「はっ」

兵士は、再び敬礼の姿勢を正すと、今度はアリーナに向かい、

「こちらです」

と、左へ曲がる道を歩き始めながら、促した。

無言でついてゆく3人。

「お父様　　^{わたくし}私　　は　　」

モニカの言葉に、アリーナたちは足を止めた。

「そうだな　　お前にあの場で話してもらってもよいが、望まぬのなら、控え室で待っていても良いだろう。そうするか？」

「それでは、お言葉に甘えて、そうさせていただきますわ」

王のその返事を待っていたかのように、モニカはそう笑顔で答えた。

「うむ　　ではアリーナ姫、あとで^{グランドホール}大広間へ。頃合いを見て人を呼びにやろう」

「わかりました」

「では」

言い残し、王は廊下を直進、^{グランドホール}大広間へと歩を向けた。

王の背中が、小さくなっていく。

「さ、私たちも行きましょう、アリーナ姫様」

モニカに背中を押され、アリーナらもまた、控え室への道を進んで行った。

＊

控え室の扉の前。

「少々お待ち下さい」

兵士が前に進み出て、ドアをロックする。

いらえがないことを確認し、兵士はドアを開けた。

そう広くない、簡素な部屋だった。

白のテーブルクロスがかかった、シンプルな木の丸テーブルがひとつと、椅子が4脚。

正面に窓がある。やや遠くて分かりにくいのが、どうやら外に面しているわけではなく、他の部屋へ開いているようだった。

「おじゃましま～す」

明るく言いながら、アリーナが部屋へ。ブライ、クリフト、そしてモニカも続く。

「それでは、私はこれで」

ここまでアリーナたちを案内した兵士が、敬礼し、外から扉を閉めた。

彼が小走りで部屋の前から去っていく足音が、扉越しに聞こえる。

＊

「さて　　」

ブライが、窓から下を覗き込んだ。

窓は、どうやら、抽選会会場である^{グランドホール}大広間の天井近くに開いているようであった。

グランドホール
大広間は、ここから階段をずっと降りた下の階に存在する。グランドホール
大広間側から見れば、この部屋の窓は、天井近くの壁にぽっかりと開いているように見えるのだ。

「ずいぶんと、集まったもんですな」

その言葉につられて、残った三人も、窓の下を覗き込む。

いくつか並べられた丸テーブルの周りに、壁際に 思い思いの場所に、出場者が陣取っていた。

「ほんとね 私を入れて33人だっけ？」

「ええ、そうですよ、姫様」

クリフトが答える。

「あの 」

おずおずと、訊ねる声がある。モニカだ。

「ん？ なあに？」

「アリーナ姫様は、下にいる全員と 戦われるのですか？」

心細そうな声。

「う～ん 」

腕を組み、考え込む素振りを見せたアリーナだが、数瞬の後、答える。

「多分、そんなことはないと思うわ」

「そうですね」

傍らのプライが続いた。

「この大会が開催される期間は二日間。とすれば、試合時間を考えても、総当たり戦^{リーグ}と
いうことはありますまい。試合が多すぎて、到底二日では終わりませんからな」

「そうよね。試合形式は多分勝ち抜け戦^{トーナメント} そーすると、ひとり5試合ってどこ？」

「それでは アリーナ姫様が戦われるのは、せいぜい5人程度、ということですか？」

「そうなるわね。残念だけど」

ちょっと困ったような微笑みを、モニカに返すアリーナ。

「えっ？」

「せっかくここまで来たんだもん、全員と戦えると良かったんだけどね。そうも言っ
られないか へへ」

いたずらっぽく、白い歯を見せて笑う。

モニカの心配すら、笑い飛ばしてしまうアリーナの強さだった。

「でも 姫様。そうとは限らないかも知れませんよ」

口を挟んだのは、クリフトである。

「この大会に出場する選手は、もともと32名の予定だった。そこに、『特別招待選手』という名目で、姫様が加わった」

他の三人は、彼の言葉をじっと聞いている。

「32名ならば、単純に5回試合をすれば優勝が決まる。ですが、そこに姫様が加わったことで、話が複雑になってしまった 招待選手である姫様が、一体どのタイミングで大会に参加することになるのか、それが分からないのです」

「確かに そうね」

クリフトの言葉を聞き、神妙な面持ちになるアリーナ。

「順当なところでは、シード選手として一試合免除、というところだと、私は思います。そうすると、戦う相手は1人減って4人程度」

「いやいや、分からんぞクリフト。もしかしたら、『最終戦は決勝戦の勝者と姫様とのバトル!』なんてことになるやも知れぬからな」

「もお 勘弁してよ〜」

にやりと笑うブライに対し、苦い薬を飲んだような表情で、アリーナが言った。

「私はイヤだからね、そんなの絶対」

「まあ、さすがに、そうはなりませんじゃろうて。 じゃが、エンドール王」

ブライは、そこまで言いかけて、目前にその一人娘がいることを思い出したらしい。

「失敬 国王陛下がどう考えておられるのか、それが分かるまで、こちらとしては どうしようもないのは事実ですな」

ブライの言う通り、この大会にアリーナがどう関わっていくかを知る術を、この時点で、彼女たちは何ひとつ持っていなかったのである。

沈黙が続く。

そして

*

その沈黙を破ったのは、眼下の^{グランドホール}大広間から突然強く聞こえ始めた、ざわめきだった。

「むっ？」

「始まるようですね」

ブライとクリフトの言うように、階下で動きがあったようである。

窓から頭をもたげ、^{グランドホール}大広間を覗き込んだアリーナも、それを見た。

^{グランドホール}大広間の入り口が開き、身の丈の半分ほどの、裾の広がった管を持った兵士が10人ほど、中に入ってきたのである。

彼らは皆、頭に丈の高い　ちょうど、クリフトが普段かぶっているような形の、黒い帽子をかぶり、服装も、一般の兵士に比べて、派手であるように思われた。

アリーナには、彼らがどのような集団であるか、ひと目で分かった。彼女の国にも、彼女の父親が作った、同じような集団があったからである。

「^{ケニヒスブラスカペル}王立吹奏楽団、ね」

「ええ。正確には、^{ミュージック・デ・ラ・ジャンダルム}近衛兵団軍楽隊、ですけど」

傍らのモニカが、やんわりと訂正を加える。

人からは「おてんば姫」などと呼ばれるアリーナも、各国語の固有名詞が飛び交う、こんな会話の端々には、いかにも王家の娘らしい^{インテリジェンス}知性を垣間見せるのだ。

モニカの言う通り、彼らは、王家を守るための^{ジャンダルム}近衛兵団の内部にある軍楽隊である。今回のような、王家の主催する行事に華を添えるのが、彼らの仕事であった。

もちろん、彼らが脇に抱えた「管」は、王家の楽団のステイタスシンボルとも言うべき^{アイーダトランペット}長ラッパであるのは言うまでもない。

*

^{グランドホール}大広間には、彼らに続き、彼らよりもっと高級そうな服を着て、髭をたくわえた、痩せた初老の男が入ってきた。

「大臣ですわ」

アリーナの視線がその男に行ったのに気付き、モニカが説明する。

軍楽隊の兵士達は、扉の左右に一例ずつ並ぶと、^{アイーダトランペット}「長ラッパ」を体の横に持ち、直立不動の姿勢を取る。

そして、ちょうど彼らの真ん中　扉の前に立った大臣が、声を発した。

「皆の者、静粛に！」

それを合図に、会場のざわめきがぴたっと止まった。

視線が、一点に集まる。

大臣は、「こほん」と軽く咳払いをした後、言葉を続けた。

「これより、国王陛下が入場される。皆は粗相のないように」

そのまま、ぎろり、と広間中を見回すと、一層の大声で言う。

「それでは、これより、第35回エンドール国王杯武闘大会、その組み合わせ抽選会を執り行う！

エンドール国王、オーギュスト4世陛下、御出まし！」

その声が終わると同時に、扉の左右、二手に別れた軍楽隊の兵士達が、^{アイーダトランペット}「長ラッパ」を掲げ、吹き鳴らす。

勇壮なファンファーレの旋律が、^{グランドホール}大広間を満たした。

そして、それに乗せ、扉の奥から、堂々たる　というよりも、むしろ「丸い」と形容するのがふさわしい体格をした男が、歩み出てくる。

エンドール国王、オーギュスト・ド・エンドール4世。

先ほどまでアリーナ達と一緒にいた、エンドール王である。

一見、頼りなさそうな太った中年男。しかし、アリーナの勢いある詰問を飄々といなし、知略に長けたブライにもその心の底は読めない。なかなかの大人物である。

王の姿を見るにつけ、集まった格闘家は皆、片膝をつき、目を伏せ、頭を垂れた。王を迎えた際の、正式な姿勢である。

総勢三十余名の格闘家が一齐に頭を下げるのを、遙か頭上の控え室から見下ろす。まさに「壯観」の一語であった。

この場にいたのが、王家に連なるアリーナやモニカ、そしてその身近にいるブライやクリフトでなかったならば、思わず溜め息と歓声が漏れるのを禁じ得なかったであろう。

王は、目前で控える格闘家たちを見回すと、一言、言葉を発した。

「楽に」

「皆、楽にせよ！」

王の言葉を合図に、大臣も大声で促した。

それを聞き、ある者はその姿勢のまま頭を上げ、ある者はその場で再び立ち上がり、またある者はその場に腰を下ろし 皆、思い思いの姿勢を取った。

「楽にし過ぎですな」

「まあ、良い」

苦々しげな大臣の呟きをさらっと流し、王は、再び格闘家達を見回すと、今度は大きな声で、言った。

「皆、良く集まってくれた。皆の闘いを間近に見られることを、余は嬉しく思う」
一呼吸置き、王は続ける。

「これから、大会での対戦の組み合わせを決める、抽選会を行うわけだが」

その、言葉の途中。

「王よ！」

やおら、格闘家の列の中から、^{だいおんじょう}大音声が起こった！

★

「！」

「ぬっ！」

グランドホール
大広間に、そして階上の控え室に、緊張が走る。

その声を発したのは、筋肉質の大柄な男。

顔中が、髭で被われている。

読者諸氏は、この男を覚えておいでだろうか。

抽選会が始まる前のことである。

壁に書かれた大会出場者名簿の、最後のひとりが「特別招待選手、その正体は秘密」と

記されていた事に「エンドール王は俺達を馬鹿にしているのか」と怒りをあらわにした男。
同意を求めようとした相手　　<拳聖> ミスター・ハンに恥をかかされた男。
その男であった。

「王が話しておられる！ 黙らぬか！」
大臣が声を荒らげるが
「良い。　　何だ、申してみよ」
「感謝する」
王が水を向けると、男は一礼し、話し始めた。

「抽選が始まる前に、ぜひとも伺いたい事がある」
「できるだけ答えよう。申せ」
「『33人目の出場者』のことだ」

＊

「ほう」
「いきなり　　来ましたね」
控え室で、事の成り行きをじっと見つめるブライとクリフト。
「いきなり『秘密』を明かすのでしょうか」
「さあ　　な」

「アリーナ姫様　　」
不安げに名を呼ぶモニカに、アリーナは言った。
「ん～　　まだね。もう少し引^ひつ張^はると思う」
やけに自信たっぷりに言っ^いてのけるアリーナに、クリフトが訊^きねる。
「どうしてですか？」
「だって、私、まだあそこに呼ばれてないもん」
「あ、そうか。確かにそうですね」

「あの名簿には『33人目の出場者』がいると書いてある。そして、それが特別招待
選手で、その正体が『秘密』だとも」
「いかにも」
「得体の知れぬ者と闘^{たたか}う気はしない。この抽選が始まる前に、その正体と　　それに

王が何ゆえにその正体を明かさぬのか、それを明らかにしていただきたい」
直接的だが、それゆえ核心を突く、男の問いであった。

「ふむ」

王は、右の人差し指で顎を撫でながら、数瞬考え込んだ。

(さて、どう出るか 狸めが)

ブライが、頭上から王をじっと見つめる。無論、心の声を娘の前で口に出すような愚かな事をするはずはない。

「そなた、名を何と言う」

王がふと、男に訊ねた。

「^{マッシュロッド}< 破碎棍 > マクダニエル」

男は、ぶっきらぼうに答えた。

この、マクダニエルという男。

< 不屈の^{ハイネス} 主女殿下 > アリーナや < 黒衣の^{ジェノサイダー} 虐殺者 > デスピサロの影に隠れ、ついぞ後の歴史に名を残すことは無い、この男。

しかし、この物語に、彼は後ほど、思わぬ形で再び登場することになる。

その時まで、読者諸氏は、この男の存在を、頭の片隅に留めておいていただきたい。

「そうか。マクダニエルよ、そなたの言うことは余にもよく分かる」

王は、深く^{うなず}頷きながら、言ってみせる。そして、いかにも悲しそうな顔で、付け加えた。

「だが 残念ながら、それを今言うわけにはいかぬのだ」

「何故に！」

思わず、マクダニエルが声を荒らげた。

「強いて言うならば 『今知られては、意味が無くなる』 からだ」

「意味が 無くなる？」

「そうだ」

王が続ける。

「マクダニエルよ、そなたの言う通り、『33人目の選手』は確かに存在する。そして

確かにこの大会に参加する それは間違いない」

マクダニエルは、無言である。

「その正体に関しては、繰り返しになるが、今は言えぬ。だが、ここにいる皆の、全ての抽選が終わった後で、必ずその正体を明かすことを誓おう」

「そうまでして、正体を隠さなければならぬ格闘家なのか？ その『特別招待選手』とやらは」

矢のようなマクダニエルの質問に、しかし、王は平然と答えた。

「それも、その時に分かる」

「ふっ」

溜め息をひとつつくと、マクダニエルは苦笑した。

「まあ、相手が分からぬまま闘わなければならない、ということだけはなさそうだ。

いいだろう、分かった」

そう言うと、その場所に、どっかと腰を下ろした。

「役者じゃのう」

思わず、ブライの口から感嘆の声が漏れる。

「えっ？」

「あなたのお父様ですじゃ」

きょとんとするモニカに、ブライが説明する。

「あれだけの鋭い質問をかわし、あの男を納得させおった。しかも、全く秘密を漏らすことなく、自分の有利なように話を進めながら、表情や身振り、言葉だけでなかなかできるもんでありませんぞ、あれは」

「確かに、^{アリーナ}私のアの字も出さなかったわね、王様」

「ですな」

言いながら、ブライは、背筋に冷たいものが走るのを感じた。

(あの人心把握力 心底、ただ者ではないのう。あの王は)

★

「では、抽選に入ることとする が、その前に、ひとつ皆に言い渡す事がある」

そう言うと、王は懐より、一枚の紙を取り出した。

折り畳まれているそれを、広げる。

それを覗き込み、 目線を上げて、言った。

「出場者の中で、一名、この抽選会を欠席するものがある」

一瞬の間の後、大きなざわめきが、^{グランドホール}大広間を支配した。

「静粛に！」

大臣の叫びに、格闘家達は再び沈黙した。それを確認した王が、言葉を続ける。

「デスピサロ、という選手だが 欠席の旨を知らせる書状が届いているのだ」
読みにくそうに、手を伸ばして紙を遠ざけながら、内容を読む。やや老眼があるようだ。

「『抽選会に欠席する。大会には出場する。組み合わせはどうなろうと構わない』」
紙から目を離し、再び格闘家達に視線を移す。

「 と、そう書いてある」

一瞬、間を置き、さらに続けた。

「この大会のルール上、抽選会の欠席は、組み合わせを運営当局、つまりこちらで勝手に決められる、というペナルティーは伴うものの、出場権利そのものを奪うものではない。それは皆も承知していることと思うが」

格闘家達は、皆、無言である。

「うむ。では、これより、このデスピサロ選手以外の ここにいる31名で、抽選会を執り行う。まずは予備抽選を 」

*

「ずいぶんと、大胆な人もいたもんね～」

半ばあきれた口調で、アリーナが言い放った。

「本番まで自分の組み合わせが分からないなんて、不利もいいとこじゃない」

「確かに、姫様の言う通り、欠席すれば非常に不利になります。それ以上の退^ひ引きならない理由があって、欠席せざるを得なくなった、ということなのでしょうか」

「よほど、急な用事でもあったのかしら 」

首をひねるばかりのクリフトとモニカ。一方

(もし、そのデスピサロとやらが、「欠席しても不利にならない」と考えたとしたならば)

難しい顔をして、考え込むブライ。

(つまり 組み合わせの如何など、そしてそれを知っているか否かなど、彼奴にとって全く問題にならないとしたならば わざわざ抽選会に出席する必要などないわけじゃが)

額に、冷や汗が一筋。

(そんな状況があり得るとしたら、二つに一つ 彼奴が必ず勝つことになっているか、
あるいは彼奴が必ず勝つと確信しているか)

「どしたの、ブライ？」

様子のおかしいブライに、アリーナが声をかけるが

(前者ならば、この大会自体がいわば出来レース。姫様をこの大会に出場させたこと
すら、周囲の目を欺くための^{おとり}罠、ということになるが)

不思議そうなアリーナの顔を、ちらっ、と見やる。

サントハイム王を、そして王国を支え続けたブライの頭脳が、フル回転する。

(いや、それは無い。姫様がそれを納得する訳もない 第一、あの狸が、将来に
外交問題に発展するような、そんな策を使うわけがない)

再び、冷や汗。

(とすれば、後者 「必ず勝てる」と確信するほどの圧倒的な実力を、彼奴が持っているというのか)

「姫様」

つい、その心配が、ブライの口をついた。

「えっ？」

アリーナは意表を突かれたようだ。驚きの表情。

「あ、い、いや 何でもありませんですじゃ」

ごまかすように笑ってから ふと真顔で、言う。

「姫様は、どうお思いになりますか？ そのデスピサロとやら」

「そうね 」

眼下の^{グランドホール}大広間を見つめながら、真剣な面持ちで、アリーナが答える。

「私だったら、何があっても抽選会は休まないわ。休むのは、本当にその辺を分かっ
てない、よっぽどのおバカさんか、そうじゃなければ 」

「そうじゃなければ？」

「抽選会なんかいらぬぐらい、誰と当たっても絶対に負けないぐらいに、目茶苦茶強いかな。どっちかね」

「！」

モニカが息を飲む。

「ほう」

一方、ブライは、驚き混じりの声をあげた。

(なかなか正確な分析をなさる　まあ、さすがに、御自分が騙されている可能性には考えが及ばれぬと見えるが　)

そう思いながらも、彼は言葉を続けた。

「して、姫様。もし、そのデスピサロとかいう奴が、それほどまでに強ければ　」
アリーナを試すような口調だ。

「姫様はどうされます？ 戦いますかな？」

「もちろんよ」

拍子抜けするほどあっけなく、即座に、アリーナは答えた。

「戦って、そして勝たなきゃ。どんな相手でも。だって、それが約束だもん。ね」
そう言って、モニカの方を見る。

太陽のような笑顔だ、とモニカは思った。

昨夜、「絶対優勝するから。約束よ」と、自分に手を差し伸べてくれた少女。
天使の光り輝く翼が、その背に見えたと思った瞬間。

その光と同じものが、今、アリーナの笑顔から、モニカには感じられた。

明るく、暖かな

そう、それは陽光であった。

アリーナ・フォン・サントハイムという名の、太陽のような少女の輝き　その陽光であったのだ。

「あ　はい　」

胸が一杯になりながら、モニカは、そう答えるのが精一杯であった。

*

「皆さん、本抽選が始まるですよ」
クリフトが、三人に声をかけた。

本抽選のくじを引く順番を決めるための予備抽選が終わり、抽選会はいよいよ、その最大の目的である、本抽選へと移ろうとしていた。

「では、先ほど決定したくじ順に従って、本抽選のくじを引いてもらうこととする」
大臣が、名簿をちらっと見て、続ける。
「1番　　ミスター・ハン選手！」

「応！」
答えて、大きな声が上がった。
座っていた選手達の中から、ひとつの人影が立ち上がる。

緑色の、ゆったりとした拳法着。
背中に揺れる弁髪。
心なしか悲しげにも見える、深い深い茶色の瞳。

「あれが　　姫様がよくおっしゃっていた　　」
「左様。あれが、そのミスター・ハンじゃ」

階上の控え室。
クリフトとブライのそんな会話の傍ら、アリーナはただ、その男の顔を、じっと見つめていた。

「ミスター　　ハン　　」
唇を噛む。

その、表情。
何というのだろう。一言では言い表せない、喜び、哀しみ、憤り　　そのようなものが、もつれ、複雑に絡み合った感情。
それが、表情に表れていた。

「あの　　アリーナ姫様　　？」

そんな表情を見て取ったモニカが、不安げに、アリーナに声をかけた。

「えっ」

アリーナの表情が、ふと、いつもの明るいものに戻った。

「あ、ごめんごめん。またちょっと入っちゃってみたい。悪い癖ね」
ぺろりと、舌を出す。

その様子を見て、モニカはほんの少し安堵したようだ。言葉を続ける。

「サントハイムの皆様は、あの方をご存じなのですか？」

「いや、直接会ったことがあるわけじゃないけどね」

苦笑いしながら、アリーナが答える。

「あの人はね、すごく有名な格闘家なの。世界で一番って言うてもいいくらい。

私も大好きだったんだ、昔」

そう言って、また、先ほどの複雑な表情に戻る。

「アリーナ姫様」

グランドホール

大広間では、ハンがくじを引き終えたようだ。

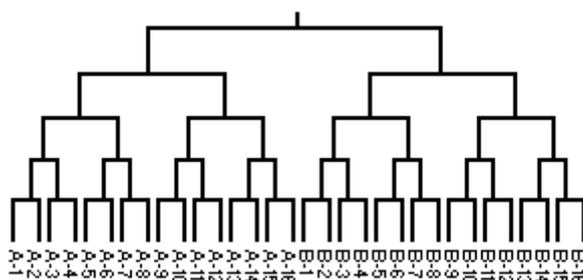
箱の中から引いたくじを、自ら開いて中を確かめ、大臣に渡す。

表情を変えず、きびすを返すと、先ほど自分がいた場所へと、帰って行った。

「ミスター・ハン選手、Bブロック2番！」

大臣の声が、その背中に響いた。

いつの間にか、部屋の左前方に、トーナメントの組み合わせ表が描かれた、大きなホワイトボードがしつらえられていた。



その表の右中央付近、「B 2」と書かれた場所に、兵士が、ハンの名前を書き加える。

「姫様の小さな頃は、それはもう、毎日毎日、ミスター・ハンに会いたい、ミスター・ハンと闘いたい、と、そればかりでしたからなあ」

ブライが、遠い目で言う。

「昔の話でしょ、それは」

ばつの悪そうな顔で、アリーナ。

「今は お嫌いなの？」

核心をつく、モニカの質問。

「ん そうね。今も好きよ。戦ってみたいと思ってる。だけど、昔ほどじゃないなあ」
一呼吸置いて、続ける。

「弱くなっちゃったからなあ、あの人。5年前のあの事件以来」
そう言って、悲しそうに、微笑んだ。

「弱く なった ?」

「そ。弱く って、いけない!こんな話してると、くじ引き見逃しちゃう!」

アリーナは、大げさに驚くと、両掌を顔の前でぱん!と合わせ、済まなそうな顔で言った。

「ごめん! この話、また今度でいい?」

「え、ええ、構いませんわ」

「ごめんね!」

とまどうモニカを置いて、アリーナは、部屋の端っこで大^{グランドホール}広間をじっと眺めていたクリフトのところへ、小走りで近づいていった。

果たして、アリーナの言う「弱くなった」とは、一体どのようなことだったのか?

彼の過去に、一体何があったのか?

その真相は、程なく、我々も知ることになる。

★

「今、何人目ぐらい?」

「ちょうど5人目が終わったあたりです」

クリフトが、アリーナに状況を説明する。

「どう? 強そうな人はいた?」

「そうですね 私が見る限りでは、最初のミスター・ハン以外は、これと言って 」

と言った瞬間、クリフトの表情が変わった。

「おっ？」

「どうしたの？」

「姫様、ほら」

クリフトに促され、アリーナが^{グランドホール}大広間を見ると　そこでは、ひとりの若い選手がくじ引きをしている最中であった。

青い^{チュニック}短衣に白いズボンを履いた、すらっとした細身の男。
長めの髪を、後ろで束ねている。

「あれは？」

「ラゴス選手　ブーメラン使いだそうです」

「へえ」

「ほう、いい気をしていますな」

横に、いつしかブライが立っていた。

「　　かなり、できそうね」

人間は誰しも、その周囲に独特のオーラのようなものを放出している。そしてそれは、各個人の力、精神力、そして人生経験などによって、自ずとその性質が定まってくるものである。

それをアリーナ達は「気」と呼んでいるわけだが、強い武術家の場合、その力を反映し、この「気」自体に既に相手を威圧する力がある。むろん、強い魔道士や剣術家などにも、あるいは闘う者にとどまらず、その道を極めた者　たとえば、経験を積んだ大商人などにも、さらには、強い^{モンスター}化物にもしばしば、同質の「気」が宿る。

決して短くはない冒険行の間に、武術に一日の長のあるアリーナや、歴戦の大魔道士であるブライだけではなく、まだ神官としての経験が浅いクリフトですら、相手の力量を、その持つ「気」で判断できるようになっていたのだ。

「強そうな方なのですか？」

モニカも、ブライに続いて、そばに来る。

「ええ、かなり　ね」

階下では、ラゴスが、引いたくじを開いたところであった。

「　　！」

その内容を見て、ラゴスは一瞬、眉をぴくっと動かした。

目前のトーナメント表を見やり　　また、くじに視線を落とす。

「これは神のいたずらか、それとも、贈り物が　　」

そう呟き、わずかに口元に笑みを浮かべると、そのまま、くじを大臣に渡した。

「ラゴス選手、Bブロック1番！」

床に腰かけ、目を閉じたまま、それを聞いていたハンの口元にも、笑みが浮かぶ。

(まさか、いきなり闘うことになるとはな　　面白い)

「！」

「ほほう！」

控え室にも、驚きが走る。

「もし、あのブーメラン使いの実力が、儂らの読み通りだとしたら　　」

「いきなり、第1回戦からメインイベント、ってことですか」

そうなのである。先ほど、一番くじを引いたハンがBブロックの2番。ラゴスが同じく1番。ということは、この両者が1回戦からぶつかり合う、ということに他ならない。

組み合わせ表の、ハンの隣に、ラゴスの名前が書き加えられた。

「この大会の行方を占う上で、非常に重要な試合、ということですか」

ブライの指摘に、しかし、アリーナは

「　　つまんないなー」

「？」

「ってことはさ、もし私が1回戦シードってことになったら、うまくいってもどっか
　　としか闘えない、って事じゃん。つまんないわよ、そんなの」

むくれるアリーナに、おもわずブライとクリフトは苦笑する。

「ははは　　姫様らしい」

「まあ、人間、欲をかき過ぎると必ずボロが出ますでな。ほどほどに　　ぬっ？」

言いかけたブライの言葉が、途切れた。

目を細め、階下を見つめる。

「あやつ」

「えっ？」

ブライの言葉に反応したアリーナとクリフト、そして一瞬遅れてモニカ。

彼女たちの視線が注がれていたのは、今まさに、くじを引いている人物だった。

頭から、^{ダークグリーン}深緑色の長いフードをかぶり、体を覆い隠している。

上からは、その表情はまるで窺えない。

しかし

「女の人？」

「ですな」

アリーナの問いに、ブライが短い相づちを打つ。

確かにそうなのだ。フードで体が被われているとはいえ、肩から胸、背中から腰にかけてのやわらかなラインは、紛れもなく、女性のそれであった。

「しかし、それよりも あの女魔道士、かなりの使い手ですぞ」

「女魔道士？」

「本当だ」

名簿を見ながら、クリフトが言う。

「ビビアン選手、って呼ばれてましたから だとすれば、使用武器のところに『魔法』と書いてあります」

「あやつ 魔法自体は普通の^{ファイアソーサリー}火炎魔法のようじゃが 魔力が相当高い」

「確かに、そう言われてみれば」

魔法を使うブライとクリフトは いや、魔法を使うものであれば誰でも その場に満ちる「魔力」を感じ取る事ができる。

これは、魔法を使うという資質の、いわば「副作用」。修練して得られるものではない。残念ながら、魔法を使えないアリーナには、一生味わうことのできない感覚である。

もっとも、ブライのように、その魔力から、魔道士が使える魔法の種類まで知る事ができる魔道士は、そうざらにいるものではない。これもまた事実ではある。

「大丈夫よ」

二人のやりとりを聞いたアリーナが、自信満々に言った。

「魔道士と武闘家では武闘家の方が強い、って、ブライはいつも言ってるじゃない」

「そうなのですか？」

後ろから訊ねるモニカに、アリーナはウインクしながら答える。

「そうなんだってさ」

確かに、ブライは、常日頃から、アリーナにそう言っている。

武闘家が魔道士と相対するには、まず間合いを詰め、呪文を唱える隙に一撃を与える。それこそが、武闘家が魔道士に勝ちうる、唯一にして最大の方法である。そして、それは武闘家にとって決して難しい戦法ではない。むしろ、いつでも可能な戦法といって良いだろう。

であるからこそ、「魔道士と武闘家では武闘家の方が強い」というブライの言葉は、一般的には、真実 というよりも、むしろ「常識」として、魔道士や武闘家の間で広まっているのだ。

しかし

「まあ、確かにそうなんですけどのう」

答えながらも、ブライは浮かない顔をする。

(しかし 何じゃ、妙な胸騒ぎがする あの女魔道士、思いがけぬ強敵やも知れぬ)

「ビビアン選手、Bブロック4番！」

大臣の声を聞き、クリフトが手元の名簿に、番号を書き加える。そして一言。

「これは ものすごい潰し合いだなあ 」

「む？」

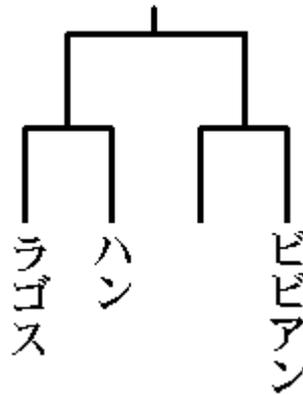
「ほら、ブライ様。姫様もモニカ姫様も」

そう言って、テーブルの上に名簿を置く。

名簿の余白には、クリフトの手で、トーナメント表が書き加えられていた。

「ここですよ」

そう言って、表の真ん中あたりを指差す。



「まだ、このB 3に入る選手が確定していないので何とも言えませんが もし、ビビアン選手が一回戦に勝った場合、次の相手はミスター・ハン対ラゴス戦の勝者、ということになるんです」

「おっほー、確かにこりゃあ凄まじいのう」

「ねえねえ、私さ 」

アリーナが明るく言う。

「このB 3に入りたいんだけど 王様に頼んだら、入れてくれないかな？」

一瞬、沈黙。

「はあ 」

脱力しきった顔で、クリフトが言う。

「 姫様って、本当に『楽をする』ってことを知らない方ですよね」

「何よー。楽したって面白いことないじゃん。クリフトこそ、まだ若いのに、そんな年寄りくさいこと言わないでよね」

「だそうですよ、ブライ様」

「儂に振るでない。元はといえばおぬしが 」

そんな、他愛のない会話が、またも、止まった。

「 クリフト」

「はい？」

「あやつは何を使う」

*

グランドホール
大広間では、ひときわ大柄な選手が、くじを引いていた。

「大柄」な、というより「巨大」な、と言った方が良いでしょうか。

そう、巨大な 筋肉の塊。

その巨体を構成しているものの中に、全く無駄な物が含まれていない、そのような体つきであった。

ひと目で、ただ者でないことは推察できる。

髪を短く刈り揃え、口ひげを蓄えている（これが唯一、無駄と言えは無駄であろうか）。

「彼の名前は？」

「サイモン、とか言うとしたな」

「サイモン。えー、サイモン、サイモン、と 」

クリフトが、名簿を目で追う。

と、その目の動きが、止まった。

「ありました。サイモン選手 騎士槍術、だそうです」

「槍使い、か」

ブライの頭脳が、ある結論に達するのに、時間はかからなかった。

「あの体格で、槍使い しかも騎士の槍術とすれば 」

「^{アーマーナイト}鎧騎士ね。しかも^{フルアーマー}全身鎧クラスの」

アリーナが口を挟む。真剣な口調だ。

「さすがは姫様。そう見て、まず間違いはないでしょうな」

^{ナイト}騎士。

それはすなわち、「己の主君に忠誠を誓い、武器を持ち闘う者」である。

しかし、「^{ナイト}騎士」と一括りに呼ばれる者の中には、その装備により、またいくつかの「分類」が存在する。

そのひとつが、鎧の重さや強度による分類である。

^{ナイト}騎士は、戦闘時には何らかの鎧をつけて行動する。まれに、^{ナイト}騎士として主君に仕える格闘家や弓使いもあり、彼らは鎧をつけないが、それはあくまで例外であり、通常は鎧をつ

けると考えて良い。

その鎧の強度や重さを、大ざっぱに三段階に分けると、

- ・「^{ライトアーマー}軽量鎧」: 革や木でできており、軽くて動きやすいが、強度は弱い。
- ・「^{ミドルアーマー}中量鎧」: 金属片や輪をつなげた^{チェインメイル}鎖編鎧や^{スケイルメイル}鱗片鎧など、重さも強さもそこそこ。
- ・「^{ヘヴィアーマー}重量鎧」: 金属板を加工して作った鎧。強いが重く動きにくい。

となり、このうち、^{ヘヴィアーマー}重量鎧を付けた騎士は、その鎧自体が特徴となるため、「^{アーマーナイト}鎧騎士」と呼ばれることが多い。

そして、その^{アーマーナイト}鎧騎士の鎧、すなわち^{ヘヴィアーマー}重量鎧の最たるものが、アリーナが口にした「^{フルアーマー}全身鎧」である。つまり、頭のとっぺんから爪先までの全てを覆うような、厚い金属板で構成された鎧だ。

そのような鎧をつける者は、必然的に、全身の筋肉が極限まで鍛えられることになる。また、動くための運動量が膨大であることと、鎧内部が高温になることから、皮下脂肪が全く付かなくなる。

そうして出来上がるのが、件のサイモンのような身体なのだ。

「しかし、^{アーマーナイト}鎧騎士とすれば こいつは厄介ですな」

「そうね」

柄にもなく、アリーナが、鼻の下に右手を当て、考え込むような素振りを見せる。

先ほど「武闘家は魔道士に対して分がいい」という話をしたが、^{アーマーナイト}鎧騎士相手では、それは全く逆となる。むしろ、^{アーマーナイト}鎧騎士は武闘家の「天敵」とも呼べる存在であった。

^{アーマーナイト}鎧騎士の鎧は、えてして、素手での攻撃を全く受け付けない。下手に攻撃を加えれば、その一瞬にカウンターで槍の穂先が突き出される。しかも、^{リーチ}武器長は圧倒的に^{アーマーナイト}鎧騎士の方が上である。

まこと、^{アーマーナイト}鎧騎士は、武闘家にとっては相性の悪い相手なのだ。

「闘うとすれば、どうされますかな？」

またも、ブライの意地の悪い問いが飛んだ。

「さっきから、そればかりね」

ほんの少し不機嫌な顔になりながら、アリーナは答えた。

「手が全くない わけじゃないわ」

「ほう」

驚きを表情に浮かべるブライ。

「どのような？」

「内緒」

不機嫌な顔のままですらうと、アリーナは、ほんの少し笑い、ブライの方を向き直った。

「なーんて。正直、頭の中で考えただけだから、できるかどうか分からないのよ」
そして、再び、階下に視線を落とす。

「でも本番が来たら、やんなきゃいけないのよね」

(珍しく、姫様が恐れていらっしゃる？)

ブライには、そう思えた。

(確かに、圧倒的不利 それを、姫様がどうひっくり返すおつもりなのか)

そんなブライの思索は、階下からの声により中断させられた。

「サイモン選手、Bブロック7番！」

「また、Bブロックですわね」

「こりゃあ、荒れるぞ」

名簿を眺めながら、モニカとクリフトはそう呟いていた。

*

「今のが、25人目 だっけ？」

「ですね。あと7人です」

抽選会も、大詰めに差しかかっていた。

「結局、あの^{アーマーンナイト}鎧騎士以降、ぱっとしたのがおらぬのう」

「確かに。このまま済んでくれればいいのですが」

と、クリフトが言いかけた時である。

突如、^{グランドホール}大広間が大きくどよめいた！

と同時に

「な、何ですの、あれ！？」

モニカが大声を上げたのだ！

「どうしたの、モニカ姫！」

「あ、あれ」

驚いた表情のままのモニカが指差す先を、あとの三人は一斉に見た。そして

「な、何、あれ！」

「何と！」

「あれは」

白い雪^{スノーマン}だるまが歩いている。

そう、アリーナ達には見えた。

異形だった。

全身、白い毛に被われている。

腰に布を巻いている以外は、裸だった。

どこまでが体なのか、どこからが毛なのか。

とにかく、白くまん丸な頭に、白くまん丸な体。

まさに「雪^{スノーマン}だるま」であった。

「ベ ペロリンマン選手 でよろしいか」

名前を呼ぶ大臣も、心なしか、顔が引きつっている。

「そうなんだな。早くくじを引かせるんだな」

地の底から聞こえるような低音で、ペロリンマンと呼ばれたその雪^{スノーマン}だるまが、大臣を急かす。

「ペロリンマン」

「一体なんなんですか、あれ」

「分かんない。ブライ、クリフト、何か知ってる？」

「さあ、僕にはとんと おぬしはどうじゃ」

「私にも」

と、考え込んだクリフトが、こんなことを言い出し始めた。

「ただ あれがそうかは分かりませんが、ひとつ、心当たりが」

「えっ？」

「ほう」

「どんなの？ 教えて教えて！」

他の三人が、一斉にクリフトの周りに集まる。

「いえ、あまり期待されても困るんですが」

苦笑いしながら、クリフトが言葉を続けた。

「エンドールの北に、山脈がありますよね。あそこに、謎の雪男が住んでいる、っていう噂があるんです。それがちょうど、あんな、白い毛むくじゃらの大男だと」

それを聞いて、アリーナは思わず、腰からへなへなと崩れ落ちた。

「噂かあ　しかも、ものすご～くうさんくさい～」

「だから、期待されても困る、って言ったじゃないですか」

困り顔で弁解するクリフトに、ブライが冷たく言う。

「ほれ、くじを引き終わったようじゃぞ」

ほどなく、階下から大声が響いた。

「ペロリンマン選手、Bブロック10番！」

「またBなの？」

「目をつけた選手が、ここまでBブロックに固まるとはのう」

「まったく、どうなってるんでしょうね」

「くじの混ぜ方が、不十分だったのかしら」

それぞれ、勝手な事を言い合う4人であったが

それが、アリーナ達をやがて巻き込む、運命の大きなうねりの　その最初の小さな一
波であろうとは、その時は誰も、考えすらしなかったのである。

＊

その時だ。

トントン、と、軽いノックの音。そして、それに続いて、男性の声。

「アリーナ姫様、お迎えに上がりました。^{グランドホール}大広間においで下さいませ」

「お、来た来た」

アリーナは、その場で、扉の外に向かい、大きな声で返事をした。

「は~い、ちょっとだけ待ってて。今行くわ」

「というわけで、行って来るわね」

そう明るく言うアリーナからは、まったく気負いが感じられない。
ちょっとその辺に買い物に行くような、そんな口調であった。

普通ならば、一言二言、そのお気楽さをたしなめるのが筋であろう。

しかし、この少女の場合、むしろ、こういう、一見お気楽に見える状態こそが、自然体で事に当たれる、ベストな状態なのである。

そして、ブライもクリフトも、それを知っていた。

だから、クリフトはただ、

「行ってらっしゃい」

と微笑んで言い、そしてブライは、

「姫様。貴方が一体何なのか、そして自分が一体何と戦おうとしているのか、あの選手たちにしっかりと教えてやって下され」

と、声をかけるのであった　もちろん、その後で、

「ああ、とは言っても、国王陛下が怒り出さない程度に、お願いしますぞ」

苦笑混じりに、こう付け加えるのを忘れなかったが。

「分かってるわよ。じゃね」

苦笑しつつ、アリーナは部屋を後にした。

「ブライ様、今のは　？」

ブライの言葉の意味をつかみかねたモニカが、ブライに訊ねる。

「言いた通りの意味ですじゃ。まあ、見ておれば分かります　ほっほっほ」

彼はそう、笑うのみであった。

(つづく)

< 次回予告 >

ついに、アリーナが、選手達の前に姿を表した！

その姿に、初めは馬鹿にする選手達。しかし、彼女の言葉が、魂が、徐々に彼らの心に火をつけて行く　　！

「不屈の王女殿下(ハイネス)」第5話　「組み合わせ抽選会(後編)」

人の業、王族の業を背負い　それでもなお、彼女は進み続ける
